



今回は、社会連携セミナー第2回「さくら塾」についての報告です。

◇7月19日 第2回「さくら塾」中部学院大学スポーツ健康科学部 柿島新太郎先生

パラリンピックや障がい者スポーツの現状と課題について、スポーツクラブマネジメントの専門家、柿島新太郎先生(中部学院大学スポーツ健康科学部)から、詳しいお話をうかがいました。

いまや、オリンピックとならぶスポーツの祭典として注目を浴びるようになったパラリンピック。パラアスリートを取りまく様々な問題。聞くことすべてが新鮮で、あっという間に80分が過ぎました。参加生徒は22名。SGH活動でパラリンピックや障がい者スポーツを研究する生徒、スポーツや福祉の分野に関心のある生徒。参加した生徒の動機も様々でした。

<生徒の感想>

今日のさくら塾のパラリンピックの話聞いて、私は今までパラリンピックとは、障害を持っている方やハンディキャップのある方がオリンピックと同じように競技をするためにあるものだと思っていました。だから、本来のパラリンピックがリハビリの延長にあるものだと知り、驚きました。しかし、以前とは視点が変わってきていることも知り、課題がまだまだあることを改めて認識しました。

オリンピックの原点の競技性をとるのか、それとも平等性をとるのか。また、パラリンピックの選手が使う義手などによっても記録が変わってしまうため、大記録がでているのは、選手がハンディキャップを抱えながら努力してきたためだけなのか、装具によって助けられて記録が出ているのか。装具の機能性で勝敗が決まってしまうことをどう考えればよいのか(注:装具にお金がかかるため、貧富によって記録が変わってしまうこと)。

今まで私が思っていたのとは違うパラリンピックの課題があることを知ることができました。今回の話で知った様々な課題をいかして、SGHの課題追求に取り組んでいきたいです。

写真: 中部学院大学HPより



講義の様子